

編集後記

昨年(二〇一九)十一月一日〜三日、書物研の豊橋大会が行われた。全日程参加するつもりで豊橋に宿をとり、初日の二川宿本陣資料館見学会に参加した。金山駅からJR東海道線に乗り、一時間弱で二川駅に着いた。もう少しいけば県境を越えて浜松市という位置にある。

駅から資料館まで旧東海道の面影がのこる道を歩く。道幅は二間ほどか。狭い。北品川商店街とかと同じ位だ。一方通行ではなく、自動車同士すれ違えないところがあり、歩いているすぐ脇を自動車が行き過ぎるので、ヒヤッとする。

資料館展示を解説つきで閲覧後、隣接する本陣、そして、旅籠「清明屋」を見学。本陣・旅籠の両方を見られるのは全国的にも珍しいとのこと。建物の構造が比較できる。

そして資料館に戻り、所蔵史料を閲覧。歌川広重『狂歌入東海道』が机の上に並べられていく。このシリーズについては

狂歌研究をしている高橋章則さんが解説した。このシリーズは、定番東海道五十三次にはない「内裏」がゴールになってるのに衝撃をうけた。

江戸の庶民は天皇の存在を知っていたか、みたいなナイーブなことが話題になるが、このような形で朝廷権威が浸透していたことが一発でわかる。T・フジタ二の「天皇のページェント」論や椿田有希子の「將軍のページェント」論(「大君のページェント」のほうがいいと思うが)の新展開の可能性をみた思いがした。

見学会終了後、二川から豊橋へ移動し、寿司「羽子吾」二階?での懇親会が始まる。自己紹介で、それまで平川新氏と思っていたら、西海賢二氏で、勘違いしていた。一次会後、サーッと波がひくように人がいなくなり、豊橋大会幹事の伴野文亮氏、任三郎ではない方の古畑侑亮氏と三人で三次会に突入。豊橋おでんぞをつつきながら二三時まで、日本の歴史学界の未来を語りつくした。え、なぜ

酔ってる割に、ピタリと二三時なんて覚えていいのか。え、それは居酒屋「輪笑団」の閉店時刻で、我々が最後の客だったからで……。

翌日は大会二日目である。残念なことに勤務校で催しがあり、名古屋に戻らなければならない。よって、一三時からの研究会には出席できないが、夕方に、ひらひらと豊橋に舞い戻って来る予定であった。

※ ※ ※

勤務校での催しとは講演会。石原千秋氏が二番手として登壇した。この講演を最後まで聞き、さらに懇親会に参加することになったため、豊橋には戻ることができなくなくなり、宿をキャンセルした。二年ほど前、冬の札幌。文学者で夏目漱石研究者の小森陽一さんに「漱石を卒論にする学生がいるので、小森さんのほかに読んでおくべき漱石研究は誰のものでしょうか?」と質問したところ、小森氏は即座に「早稲田の石原」といった。

迂闊にもしらなかつたが、小森・石原
両人は『漱石研究』という雑誌を編集し、
共著で『漱石激説』を刊行し、漱石の共
同研究者であつた。

さて、石原氏の演目は「読みの重層的
非決定」である。すなわち、読書・読者
論。書物研に関係なくもないので、紹介
したい。

小森さん同様、石原氏は話し巧者であ
つた。話し巧者は、前提を、ゆつくり、
しつかり造つてから本題にはいつてい
く。研究発表ではなく、市民を聴衆にふ
くむ講演では、なおさら前提づくりが重
要なんじゃないか、と思つた。

講演の前提は「重層的非決定」である。
この言葉にピンとくるのは、全共闘世代
へ高度成長期世代であらう。全共闘世代
には吉本派が多いが「遅れてきた青年」
の私は断然、高橋和巴派である！……
そんなことはどうでもいい。「重層的非
決定」は一九八〇年代のバブル期の、あ
る論争から生まれた概念である。

ある論争とは吉本ばなな……じやなく
て、そのオヤジの吉本隆明と埴谷雄高の
論争である。これは一九八五年に勃発し
た「コム・デ・ギャルソン」論争と呼ば
れている。

ことの始まりは、女性ファッション雑
誌『anna』（八四年九月号）に「現
代思想界をリードする吉本隆明のファッ
ション」と題して、吉本がコム・デ・ギ
ャルソンの服を着て誌面を飾つたことに
ある。吉本はコム・デ・ギャルソンを主
宰するデザイナー・川久保玲を高く評価
していた。

これを見た埴谷は激怒した。そして公
開書簡という形で『海燕』（八五年二月
号）で抗議し、さらに、吉本が身につけ
ているジャケット、シャツ、カーディガ
ン、パンツ、靴など総額一七万五千円ほ
どのファッションを「ぶつたくり商品」
と呼び、吉本がその広告塔になつてい
ることを厳しく批判、いや糾弾した。

吾国の資本主義は、朝鮮戦争とヴェ

トナム戦争の血の上に「火事場泥棒」
のボロ儲けを重ねに重ねたあげく、
高度な技術と設備を整えて、つぎに
は、「ぶつたくり商品」の「進出」に
よつて「収奪」を積みあげる高度成
長なるものをとげました。（『海燕』
八五年四月号）

これに反撃したのが吉本の公開返信
「重層的な非決定へ」である（『海燕』
五月号）。吉本は埴谷が「妄想」をい
だしており、「貴方が陥ち込んでいるのは
まぎれもなく最低のスターリン主義者で
さえも滅多に行使しない卑劣なデマゴギ
イ」と罵つた。

ソ連がなくなつてひさいしい現在、「ス
ターリン主義者」を最大級の侮蔑用語と
して振りかざすのは、なつかしい感じが
するが、それはともかく吉本の「重層的」
反撃の要点は、埴谷が一つの価値にコミ
ットしすぎている、ということにある。
現在の文化や観念は多層的に重なつて
いる。その様態の「どこかに重心を置く

ことを拒否して、層ごとに同じ重量で、非決定的に対応する」べきだ、ようは、マルクスの『資本論』と黒柳徹子の『窓ぎわのトットちゃん』を等価値に、同じ水準で論ぜよ！ということである。

加藤典洋によれば、この論争の背景には高度成長を経た、消費社会におけるマルクス理論解釈と、南北格差問題がある、という（二つの視野の統合）『可能性としての戦後以後』。どうということか。

地球上には「上部構造としての浮ついた消費欲望の蔭で、下部構造としての悲惨な「南北」問題が隠蔽されている」構図がある、という。隠蔽されている、というよりは、そもそも構造的問題は目につきにくいんじゃないか、と思うが、話しを戻す。

「北」の繁栄・消費社会が「南」からの搾取と、その悲惨の上に成立しているわけで、埴谷は「南」の視点・立場にコミットして吉本を批判している。一方、吉本の立場は「北」の「浮ついた欲望」

と「悲惨な「南」の状況」を二項対立とせず関心対象として対等におく。一方からのみ他方を見るのではなく、それぞれを等価値として、両方をふくみこんだパースペクティブでとらえている、という。

吉本か、埴谷か。

私は知識人が「南」にコミットしなくでどうするの？ 埴谷に近いのだが、石原氏は、本を、文学を読むときは、埴谷的ではないけない、吉本的に読め、という。多様な現実、多層構造の「どこかに重心を置くことを拒否して……非決定的に対応する」ように読め、という。

※ ※ ※

石原氏には漱石・文学研究者とは別の顔がある。たとえば、『中学入試国語のルール』『秘伝 中学入試国語読解法』『教養としての大学受験国語』といった受験国語対策本の著者という顔である。「別の顔」と書いたが、実は「読み」という点で、文学研究と密接につながっている。

豊かな読みとは、自由な読み、自由な

解釈である。シャルチエもいつているように、テキストは同じでも、読み方は読者の期待や関心に依存する。すなわち、読者の数だけ読書・解釈があるはずだし、あつていい。

読者A、読者B、読者C、読者D……。

それぞれの読者の読み。「個性」なんていうまでもなく、どの読みが正しいかを決めることはできない、ということはず解されるはずだ。画一的な読みと、自由な豊かな読みは対極にあつて、どちらがいいかといえば、みな後者だという。だろ。浮遊的ノマド性をもった読み、読みの多様性が推奨される。

ところが、受験「国語」の読み、テストの読みはそれではいけない。どれも正解、では採点ができない。試験にならない。だから、「正しい」読み、一つの読みを強制的に答えさせることになる。すなわち受験の読みは、重層的非決定ではなく、単層的決定である。

学校的に「正しい」ものが正解。文科

省が求めるようなモラルに則った解釈、選択肢を選ぶのが正解。したがって、点を稼ぐには重層的非決定を棄てて、受験国語の単層はどのような傾向にあり、どの選択肢に決定すればいいのか、を知らば、百発百中になる……という。なるほど！ 石原氏の参考書、受験生のころに読みたかったが、遠い昔、そのころは出版されていない。

※ ※ ※

ここで私は、ふと歴史を教えている大学教員という我に還った。演習ゼミの中心は論文輪読である。毎回、「揚げ足を取れ！」「納得してはいけない！」「疑って読め！」とか叱咤激励を飛ばすが、静寂な時間が延々とつづく。それがどうしてなのか、突き詰めたことはなかった。ところが、講演を聞いていて、ハタと気がついた。彼らは小中高と一二年間習慣づけられてきた「国語」の授業の読み方、あるいは、受験で点をとるような読み方をやってるのではないかと。

論文のなかに「正解」を求める読み。殊に、歴史論文に一つの解釈が「正しい」読みで対応するとどうなるか？ 著者の主張が史料で実証されているかのようにみえて終了。これでは、疑問なんて湧いてこないんじゃないだろうか……。

私は、輪読がなかなか活発にならず、質疑応答の議論の場とならないことの原因がわかったような気がした。正解は一つ。「正しい」ことを探す読み。学生たちは、論文を無意識のうちに、受験国語のように読んでいるのではないかと。受験国語の呪縛。この呪縛を解くにはどうしたらいいか……。

石原講演で配られたレジュメの構成は、庄司達也編『芥川龍之介ハンドブック』より、石原氏執筆分の項目「読者／読者意識」「ジャンル」、および、芥川龍之介『蜜柑』全文、梶井基次郎『檸檬』、夏目漱石『それから』、谷崎潤一郎『秘密』の部分などである。

石原氏はこれらの文章、断片を深読み

して「く物語」「く」という物語」というのを抽出してみせた。たとえば『それから』であれば鏡に向かう代助が、三代のことを思つて女装する物語とか。

ここで私は歴史論文輪読に、重層的非決定の方法を応用するとどうなるか、と考えた。すなわち、論文から、ムセキニンに勝手に、物語を抽出して作り出す。ムセキニンとは著者が考えている文脈とは関係なく、読者が主観的に、関心があるところに意識を集中して、勝手な読み取り方をする。試験では×をもらう読み方をする。

たとえば、吉川の「身分的周縁と近世社会」シリーズに、岩本馨の秩父霊場があつた「札所」を輪読した。で、勝手に物語を抽出するとどうなるか。

本来、三十三変化の観音菩薩霊場が三十四霊場になつちゃう物語、とか、開帳で武蔵国を練り歩く観音像の物語、とか、本末制度・寺檀制度を逸脱する末寺の物語、寺は仁政主体の場合があり御救

を施されなかつた市郎衛門が「妙音寺大どろぼう」と叫ぶ物語、とか。物語タイトル長くてすみません、というか、そもそも、この編集後記、長すぎるぞ……。

で、そういう風に物語をつくると、じや、四国は八十八箇所だけれど、なぜ八十八？ 出開帳でタダ？ 見料どうなつてんの？ 神社が仁政を施す場合つてあつたの？ とか疑問が湧いて、調べなきゃならなくなる。

たくさん本を読んでいる学生は「国語」で点を取る読み方と、読みたい本を読むときの重層的・非決定な読みを自然に区別している。だが、それは稀で、大多数の本を読まない学生は、正しい答え探しの読み方をしてしまう。これを打破する必要がある。ゼミが静かなのは、私がここに気づかなかつたからである……。

※ ※ ※

重層的・非決定な読み。この議論の基底には石原氏の「読者／読者意識」がある。この「読者」は八類型がある。①作者が

意識した読者、②小説表現が内包している読者、③小説それ自身が想定する読者……というように類型化されている。

テキスト解釈の多様性、行間を読み深める可能性を示しており、じつに興味深い。だが、違和感があるとすれば、それがすべて、作者の側、および、テキストの分析から想定される読者像であることだ。

なぜ、そんなことを思いついたのか、といえば、日本アーカイブス学会から依頼された横田冬彦『日本近世書物文化史の研究』の書評をしたからである（『アーカイブス学研究』三一号掲載）。

この本は「読者がいなければ書物は成立しない」という一行から始まる。なんだ、当たり前じゃないか、と思うかもしれないが、これまでの読者論は、テキストの内容から読書・読者を想定していた。「テキストそのものから読者を類推することによって、混乱を招いてきた」という。たとえば、テキストの難解さ、

易しさから、これは学者・思想家が読者の本、これは民衆が読者の本、というような類推である。

たとえば、儒書・仏書などの内容の堅い「物の本」は知識層が読み、「草紙」などのエンタメ本は民衆が読むと類推する。その類推はある程度まで実態を反映しているかもしれない。

しかし、問題は両者を分断して捉える点にある。すると、民衆は読書によつて主体を形成することができなくなるではないか、それでいいのか、というのが横田氏の問題提起である。

詳しくは、『日本近世書物文化史の研究』に譲るが、重層的・非決定な読みを讀者に即して、読書の多様性として捉えるならば、テキストの側からのみでなく、実在する読者が、実際に、どのように読んだのかを追及する必要があるはずだ。『日本近世書物文化史の研究』に登場する読者たち、そして、その読書は個性と創造性に満ちている。（小川記）